

2017年12月17日〈待降節第3主日礼拝〉 飯川雅孝 牧師

招詞：フィリピ3：13－14， 20 聖書：ルカによる福音書2章22－38節

説教： 『イエスを待ち望むということ』

1. アドベントにはシメオンやアンナのような敬虔な心が求められる。

アドベントも第三週目に入りました。ルカによる福音書はキリストを迎える心をシメオンとアンナによってわたしたちに伝えております。ルカは多くの敬虔な人物の中から、とくに二人を厳選したのでしょう。当時、民衆を指導すると言えども、エルサレムの神殿に仕える祭司たちや律法学者、パリサイ人は権力志向で民の貧困を顧みない間違っただけの人たちでした。しかし、それとは反対にシメオンやアンナは敬虔な人でした。彼らの生き方は詩編が伝えていますが、貧しく、自分の力がなく、しかし神を待ち望むことにより力を得る人、神の律法に真摯に従う喜びのある人でした。ですから、今日の物語から二つのグループの両極端の生き方を見ます。それはそのまま、神の子イエスに対する態度そのままを示しております。古代からイスラエルの預言者はこの世を神の国とするために、神から派遣され、権力や金力、間違っただけの人の集まりのあり方を正そうとした故に迫害されてきました。しかし、神は彼らに、聖霊による力を与え、この世に勝利を得させました。その代表者としてシメオンは神の子イエスに救いを見て、イエス誕生の1800年前とも言われる頃に、アブラハムに約束された言葉「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」（創世記12：3）が、今、実現した。神の国が到来した。それは「万民のために整えてくださった救い、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れ」となったのであります。それは同時に神の子イエスが十字架を担うことでもあります。だからこそ、シメオンは両親のヨセフとマリアに「この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——この世の神に背く心があらわにされるためです。」と語らざるを得ませんでした。アンナは語らずとも、同じ思いです。両親はその時はまだ何のことも分からなかったのです。

2. 敬虔な姿勢は悔い改めにより神からの啓示により与えられる

さて、このシメオンとアンナの生き方の中に秘められた中心的意味は、「お告げを聖霊から受けていた。・・・“霊”に導かれて」いたことにあります。それは聖霊を受けた者にのみ感じ取れる鋭敏な意識であります。祭司や律法学者にはない、この世の権力から距離を置いていたシメオンになぜ霊の力が与えられたか。ある敬虔な信仰者の体験の中に、

今まで気安く、誰からも付き合い安いと周りから思われていた男が、ある時から急に人が変わったように真面目になった。自分はそのことに非常にショックを受けた。誰からという事もなく、聞けば教会に行くようになったと言う。それで自分も教会に行ってみた。それが自分がキリスト教に入るきっかけになった。

ということが書いてありました。ここにヒントがあります。この世に迎合することの中には真

理の種は蒔かれていない。むしろ、今までの周囲と合わせて気楽な道を歩んでいたが、ある時それとは異なる事柄に出合って躓いた。それは邪魔になる。しかし、どちらが真理かの問いかけが提示される。その人には自分を変える出合があったわけでありませう。

しかし、一般には、わたしたち、人生経験をして30代を越えると、自分の殻が出来てしまい、それでよいと思って人から何を言われようとあまり気にせず押し通してしまう。ところが、人間、大きな試練に遭うとその価値観がすべて崩れてしまう。驕りとか、権力欲とか、金銭欲はどうしてもよくなる。その時には自分はどう生きたらよいかを真剣に考えさせられる。そのような告白を聞くことがあります。

また、試練といえるほどではなくても、いままで恵まれない生活のために、社会的にはさげすまれた生活をしてきた、親一人子一人の女性が、何かのきっかけで子どもが教会に行くようになった。それにつられて自分も行くようになった。自分を知る人から、「あんたは最近明るくなったね。」と言われた。また、仕事も変わっていた。そこにはただ気安く平安が与えられたということではなく、暗闇から明りに照らされた現実の否定という痛みと未来への希望が与えられた喜びを感じたと考えられるのであります。

つまり、いずれの場合も、自分の生活自体を心の中から変えてしまう大きなインパクトがあった、自分自身が悔い改めに導かれたことを伝えております。本来わたしたちの生まれたままの本性は神のみ心から離れたものであります。だから、バプテスマのヨハネは彼のところへ、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起すな。」と激しい言葉を投げつけ、神の前に自分が何も誇るものを持っていない弱い者、貧しい者であること知らしめようとしております。そして、このようにして自分をへりくだされたものはじめて神に救いを願うようにさせられる。詩編でその気持ちを吐露している詩人はそのような人であり、シメオンもそのような人であった。だからこそ、神から聖霊が与えられ、普通の心では感じ取ることが出来ないイエスの誕生を救い、主を見たと言明することが出来た。イエスのお誕生を待つということは、このように砕かれた心を持たなければ、喜びをもって迎えることができないのであります。

### 3. 悔い改めた心は天国へ向けて歩む導きとなる

わたしたちはこのようにして自分が打ち砕かれた時、霊の目が開かれ、天国に向けて歩む道に促されます。パウロはガラテヤ書（5章23節）で「霊の結ぶ実はいは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」と言っております。キリストは「良い木は良い実を結ぶ、悪い木は悪い実を結ぶ。木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。」とわたしたちに聞く耳を持つように常に促されています。霊による良い実を携えたものが天国に行けるのであります。11月25日の説教では『人生の秋に』と題して元上智大学の学長ヘルマン・ホイヴェルス神父の言葉を取り上げ、説教をいたしました。彼は、50年に亘る日本の生活の中

で、日本人を理解し、愛し、日本の持っている良いものを可能な限り取り上げ、ドイツ人として信仰の観点から日本の持っている良さを紹介してくれました。彼はこの書の冒頭でその著した意図を「実ることは人生のすべてではないでしょうか。時間の畑で心の実をむすぶこと。だが、刈入れが豊かか貧しいか、それは収穫の主である神だけがご存じです。人は人生の秋に、なにかよいものを世の中に残したいと思うものです。」と語り、なにか良いものとは人の心である。「心はものにまさるもの。心はことばなしには磨かれざる宝石、光なきダイヤモンド。」と語り、その心を磨いた宝石としてご自身の著作『人生の秋に』を日本人に献呈されました。彼はその実の結び方について人間社会の競争を否定しません。日本の文化はいにしえから、「美術、文芸、学問の世界においてお互いの競争が進歩をさせて来た。武士道でも騎士道でも、利益ではなく、抜群の功名一名を挙げる—ということが目当てでした。これはもちろん本当の価値ではないけれども、わたしたちは周りの人たちの美德をみることによって、それはどんなに心の中の美しい刺激になることでしょうか。」と語ります。わたしはここに神父が日本人が昔から持つ武士道や騎士道や功名心に目を向け、日本を愛し、その風俗習慣をよく理解している彼の洞察と愛情に驚かされます。神父は最後に信仰の思いとしてまとめます。「人間の価値はどこで決まりますか。この世ではない。永遠の神の国においてです。人がどのくらい、世の中で、神の御心を自分の心として実現したか、その基準によってです。そして、最後の宴会の時、神はそこに招かれている人のこの世で実った価値のすべてを発表して下さいます。上席の方も末席の方もおられても、幸いなるかな神の国」であります。

最後に、わたしは、天国に向かう目的をもって活動している身近に見る団体を紹介したいと思います。毎年クリスマスには幼稚園や保育園でお誕生日に子どもたちが貯めた献金をNPO法人に寄付しております。例年J会に30万円くらいになります。東南アジアやアフリカの医療活動を支えている団体です。昔、島根大学の教授の岩村昇さんがネパールに行っていました。わたしたちの幼稚園では、今年はJHに支援することにしたということです。聞けば、その方はその医療活動を無料奉仕でやっているとのこと。カンボジアにこの間まで家族で行っていたのですが、今は日本にいて、ご主人が月に1回カンボジアに支援に行く。活動の目的は『医療の届かないところに医療を届けること』。途上国での貧困や医師不足で医療を受けられない人々へ無償で医療支援をする。ミャンマーとカンボジアとラオスが主で、現在年間約2千件の手術を行い、1万2千人の患者の診療を行っている。その方は幼稚園の園児たちに医療現場をスライドで見せ、4歳の子どもが首に大きな癌が出来て亡くなった映像やなどを紹介し、「いつかはお友だちがこのようなことを理解して欲しい。」と語っておりました。わたし自身も、改めて自分の意識に神の言葉が走った一瞬でした。